

絶ゆまぬ流れのなかで

# 海と緑の城下町

相馬市の歴史は古く、その形は椎木北原遺跡の旧石器時代の遺物にあらわれています。さらに、成田、坪田、馬場野地区に点在する古墳の人物埴輪や太刀飾などの出土品から、有力な豪族が住んでいたことがうかがえます。

中世には、桓武平氏相馬師国の子相馬師常が奥州合戦に従軍し、その功により相馬氏がこの地方を治めました。この相馬氏は本拠を下総（千葉県流山市周辺）にいていましたが、六代相馬重胤が元享三年（一三三三）に当地方に移住しました。

時は移り、江戸時代初期の慶長十六年（一六一一）、十七代相馬利胤が小高城（相馬郡小高町）から中村城を居城としたことで近世城下町が形成され、ここから本市の発展が始まっていきます。町づくりは、町の南と北の入口に土手を築いて、「枡形」とよばれる城下町独特の道路形態をつくりあげました。旧中村城下の北東部（現在の新町・田町境）と南東部（現在の北反町・寺前境）に今もなお残っており、当時をしのぶことができます。

このように相馬氏は、鎌倉時代初期から明治維新に至るまでの約七百年間、当地方を支配してきた



鶴の尾岬灯台

ました。この間に育まれた文化と伝統は数多く、中でも相馬野馬追や相馬民謡は全国的に知られています。

今、本市は、長い歴史に培われた文化と伝統を基盤に、「海と緑の健康都市」をめざし、二十一世紀へと飛躍する新しいまちづくりに励んでいます。人口約四万人。その表情は、西に阿武隈の山なみ、東に太平洋があり、中部と東部に広がる平坦地を地藏川、小泉川、宇多川、日下石川の中小河川が東に流れています。また、小松島といわれる景勝地松川浦があります。

気候は、東日本型の海洋性気候に属し、冬期も温暖で降雪も少なく、気温の年較差は県内他地域と比べ比較的小さく、さわやかで過ごしやすい地域です。海・山両面の美しい環境と、それに育まれてきた海の幸、山の幸を新鮮なまま口にすることができ、相馬市は、まさに「自然の宝庫」といえるでしょう。



中村神社の参道